

興教大師覚鑊の曼荼羅観について

赤塚 祐道

はじめに

覚鑊聖人は『立申大願事等』に、

一、両界曼荼羅一舗を図絵供養し奉るべしへあるいは大あるいは法、便に従え。⁽¹⁾

とあり、『求聞持立願文』に、

両界曼荼羅ならびに本尊の像、各一舗を図絵供養し奉るべし。⁽²⁾

とあるように、求聞持法の大願を立てるについて曼荼羅を図絵し供養する旨が書かれている。この両部の曼荼羅の解釈を巡っては、『**天**界曼荼羅略釈』、『**天**界秘事』、『曼荼羅沙汰』などがあげられる。他にも撰述の所々に曼荼羅についての見解を見出すことができる。中でも『**天**界曼荼羅略釈』⁽³⁾について、同書は『秘蔵記』や『大日経疏』の影響が大きいと小峰彌彦氏も指摘されているように、『秘蔵記』を参考にする点もあったことがわかる。また、『異本即身成仏義』の影響もみることができ覚鑊聖人が弘法大師の著作をどのように取り扱っていたかも覚鑊聖人の教学思想を考える上で必要となる。

さて、今回は「曼荼羅」を覚鑊聖人がどのように捉えていたかを探る訳であるが、松崎恵水博士、頼富本宏博士、小峰彌彦氏らの論考があるので、本論ではそれらも踏まえた上で考えてみたい。

曼荼羅の解釈

曼荼羅に関して覚鑊聖人は次のように述べている。

覚鑊上人の口伝に云く、現図曼荼羅は龍智時代まで之れ無し。心眼を以て感見す。故に金剛智時代に至って、龍智阿闍梨に稟習し、未来の衆生の為に図せしめ給う。⁽⁴⁾

この文は、覚鑊聖人の口伝を集めた『拾穂録』にあるものであるが、覚鑊聖人は金剛智が龍智に習って初めて図絵したと考えているから、一般的にいわれる金剛界曼荼羅の金剛智空中感得という説を踏まえている。

さて、覚鑊聖人は「曼荼羅」を意味的にどのように捉えていたのか考えてみると、『真言宗即身成仏義章』に次のように述べている。

問う、曼荼羅とは何の義ぞ。答う、曼荼羅とは輪円の義、また發生の義なり。問う、いかに輪円の義という。答う、衆徳輪円周備なるをもつて、よつて曼荼羅と名づく。⁽⁵⁾

と問答形式にて意味を答えているが、『大日經疏』第三に、

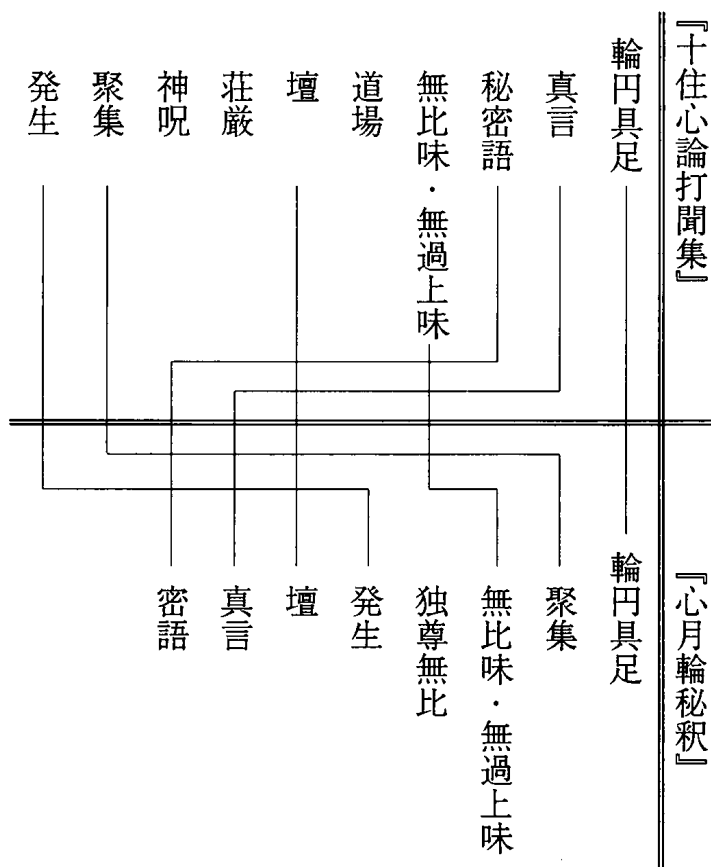
是の如くの衆徳、輪円衆周備せるを以ての故に曼荼羅となづくるなり。⁽⁶⁾

とあるのを承けており、また『保延六年談義打聞集』を見ると、

曼荼羅とは輪円具足と翻す。これ総なり。次に九種の翻あり。真言と秘密語と無比味と無過上味と道場と壇と莊嚴と神呪と聚集と發生と等なり。また六智五種法身等の義もあり。⁽⁷⁾

興教大師覚饒の曼荼羅観について（赤塚）

とあり、輪田具足を総として、その中に九種の訳を充てている。同様に『心月輪秘釈』においても、曼荼羅とは、正翻には輪田具足というべし。(略)あるいは聚集と翻す。(略)あるいは無比味・無過上味として。(略)また月輪の独尊無比にして、一切の星辰羅らず。(略)あるいは発生という。(略)あるいは古には壇と訳す。(略)あるいは真言とも翻す。(略)あるいは密語と訳す。⁽⁸⁾とある。これらはすなわち、



のように関連し、これら曼荼羅の意味については、『大日経疏』第四に説かれる文に通じるが、⁽⁹⁾「真言」「密語」「秘密語」といった意味を充てている点は、弘法大師の『十住心論』に、

興教大師覚鑒の曼荼羅について (赤塚)

られる「*阿彌陀*」という表現とその図像のみで、他の尊格について記述を見ることができない。覚鑒聖人の尊格信仰については不動・阿弥陀・金剛薩埵・尊勝仏頂・毘沙門天などがあげることができるが、それらが別尊曼荼羅の形式で著作上に、文章的にも図像的にも登場することはない。

この阿弥陀曼荼羅については那須政隆氏が弘法大師の『作法次第』との関係を指摘され、また頼富本宏博士は当時の時代背景と図像的配置との関係を考察されている。⁽¹⁴⁾ また、松崎恵水博士も那須・頼富両氏の論考を継承しながら、八大菩薩に阿弥陀の真言を配す点に関しては阿弥陀の真言を意図的に八大菩薩に配当されたとしながらもさらに推考すべき問題が残ると言わざるをえないとされている。⁽¹⁵⁾

この八大菩薩と九字明の関係の一部については、すでに拙稿があるので簡単に述べるが、つまり、八大菩薩に本来の種子を配さずに阿弥陀の九字明を配した点について、覚鑒以前に三井寺皇慶や勧修寺寛信をはじめ、次のように阿弥陀の小呪を八大菩薩に配置していることが行われていたことから、こうした諸師の影響も考えられ、⁽¹⁶⁾『五輪九字明秘密義釈』の曼荼羅が成立したと考えられる。

また、阿弥陀の九字明だけでなく、九文字の真言を諸仏に配置することは『五輪九字明秘密義釈』以外でも、『法華経秘釈』『菩提心論題釈』でも中台八葉の九尊に九文字を配していることがわかる。つまり、『法華経秘釈』には、

今、深秘に約してこれを釈せば、いわゆる梵名の
*サハスバハサハ*とは、これすなわち一部の法曼荼羅
 を撰し、諸尊秘密の号を挙ぐ。しばらく法部に約して

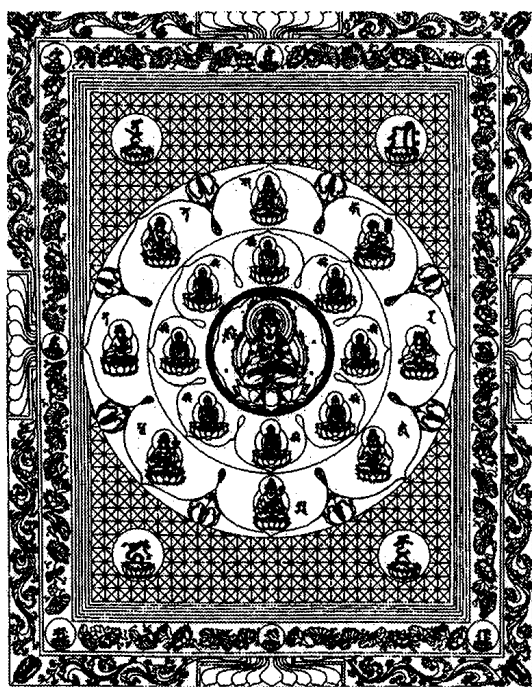


図1 九字（阿弥陀）曼荼羅

また、江戸時代には、この『密厳諸秘釈』を原本にして作成されたと思われる本地曼荼羅も作られた。その版木が埼玉県三峯神社に現存し、彩色されたものが神戸実相寺に伝わっている。この本地曼荼羅は、三峯神社の本地仏十一面観音を中尊として、その周囲はまったく『五輪九字明秘密義釈』の阿弥陀曼荼羅と同様の図を用い、新義寺院との関係のもと製作された曼荼羅であると考えられる。これに関連して、新義真言宗総本山根来寺には、宝暦三年（一七五三）三峯山観音院日光、寛政七年（一七九五）三峯山観音院日高の五輪塔が、天明五年（一七八五）三峯山観音寺尊雅、寛政三年（一七九一）三峯山観音寺乗性の位牌が現存している。日光や日高に関して、また三峯山観音院が豊山もしくは智山の僧侶による新義派寺院であったことは頼富本宏博士も述べているとおりであり、⁽²³⁾ 覚鑊聖人を慕う三峯山の僧が『五輪九字明秘密義釈』の曼荼羅を用いて神社の本地曼荼羅を製作したと考えられる。

以上、別尊曼荼羅や別尊法の流行という時代背景がある中で、密教と浄土教を両側面から述べた『五輪九字明秘密義釈』が成立し阿弥陀如来を密教的に位置づけるため九字（阿弥陀）曼荼羅が成立したわけだが、梵字九文字を巧みに利用し取り入れている点は弘法大師の『法華経開題』にも通じる点があり、様々な背景の中で成立した曼荼羅といえよう。こうした阿弥陀曼荼羅が説かれる一方で他の尊格に対する曼荼羅が説かれることはないが、覚鑊聖人は阿弥陀如来を密教的に位置づけるために別尊曼荼羅を用いて密教の阿弥陀如来観を明確にしたのである。

伝記類における曼荼羅

仏画・仏像を問わず伝覚鑊作といわれるものが各地に残っているが、部分的に『興教大師伝記史料全集』

に収められている。⁽²⁴⁾ 浅草寺の両部種子曼荼羅をはじめ、高野山金剛院・同妙音院・同泰雲院に両部曼荼羅、長谷寺の種子曼荼羅、尾張実相院の種子曼荼羅、根来寺の両部曼荼羅・種子曼荼羅があるという。浅草寺及び長谷寺の両部曼荼羅、次に挙げる大仏頂曼荼羅に関しては図版にて確認ができる。⁽²⁵⁾

また、先述したように覚鑒聖人の別尊曼荼羅は阿弥陀曼荼羅のみであると述べたが、伝覚鑒作とするものに、

大仏頂曼荼羅 長谷寺 「天正十二 三月廿七日 開山真蹟与有／

根来寺什物」

興教大師六字曼陀羅 上品蓮台寺 (『京都府寺志稿三八』)

尊勝曼荼羅 高野山西禅院 (『紀伊続風土記』)

と、大仏頂・六字・尊勝曼荼羅といったものがあると伝えられている。⁽²⁶⁾ 尊勝曼荼羅は覚鑒聖人の尊勝仏頂信仰との関係のもとこのように伝覚鑒作の尊勝曼荼羅が伝えられたとも思われるが、逆に覚鑒作と伝えられる阿弥陀曼荼羅の作例がない。単独尊として描かれる場合も不動明王が多い。

また、別尊曼荼羅というか垂迹曼荼羅というべきものであろうか、神奈川県立金沢文庫には「伊勢種子曼荼羅」なる図が二種類保管されている(図2・イ、図2・ロ)。⁽²⁷⁾ 櫛田良洪博士も取り上げているが、中世神道

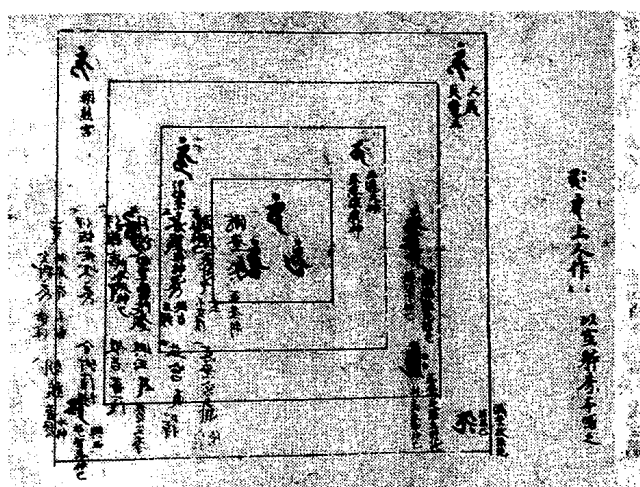


図2 - イ 伊勢種子曼荼羅

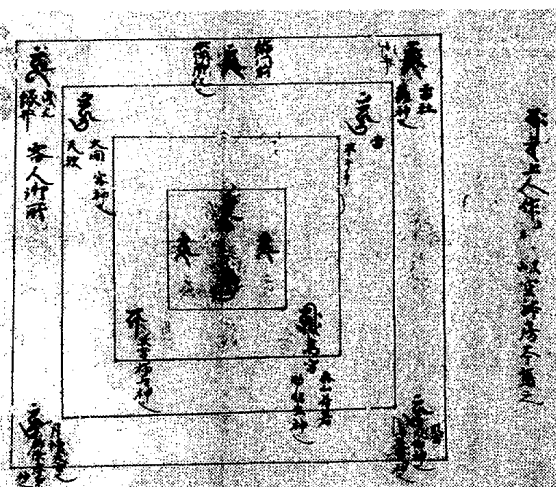


図2 - ロ 伊勢種子曼荼羅

興教大師覚鑒の曼荼羅観について（赤塚）

説が形成されていく中でこうした覚鑒聖人と伊勢神道との関係が伝えられるようになったものと考えられる。本図は伊勢神宮の祭神を密教側から解釈した垂迹曼荼羅であり類似した図像が金沢文庫所蔵の他の文献にも収録されている。

覚鑒聖人は諸神祇を根来に勧請したことが伝記史料等に見ることができ⁽²⁹⁾るが、その中でこの伊勢神祇曼荼羅に関する史料が伝わっていない点からすると、どのよう⁽²⁹⁾にして覚鑒聖人と伊勢信仰が結びつけられ、この神祇曼荼羅が覚鑒作とされたのかという点は今後の課題でもある。

五輪曼荼羅

最後になるが覚鑒聖人の観法の一つに五輪曼荼羅観があげられる。この観法は『大日経』の五字嚴身観な⁽³⁰⁾どに基づき形成されるが、『五輪九字明秘密義釈』の書名が示すように九字（阿弥陀）曼荼羅と並んで五輪曼荼羅を解釈している。すなわち『卒塔婆十種釈』に、

我はすなわち⁽³⁰⁾𑖀𑖩𑖱𑖨なり 次でのごとく腰と腹と心と額と頂となり 腰下の⁽³⁰⁾𑖀𑖩𑖱𑖨字は本不生なり 金色の方形は仏心の地 臍輪の⁽³⁰⁾𑖀𑖩𑖱𑖨字は言説を離れ 白色の円形は大悲の水 心上の⁽³⁰⁾𑖀𑖩𑖱𑖨字は染著無し 赤色の三角は大智の火 額上の⁽³⁰⁾𑖀𑖩𑖱𑖨字は因業を離れ 黒色の半月は大力の風 頂上の⁽³⁰⁾𑖀𑖩𑖱𑖨字は虚空に等し 雑色の円形は大空の輪 重々の相累は隔別無し⁽³⁰⁾。

といい、また、『五字略頌』に、

われはすなわち⁽³⁰⁾𑖀𑖩𑖱𑖨、次でのごとく腰と齊と心と額と頂となり。

といい、これらは『五輪九字明秘密義釈』に関連し、

五大・五輪・六大・法界・十界輪円・一切衆生色心実相・自身成仏の図に曰く

(図あり。今は略す。)

右の五輪の名、また頂輪・面輪・胸輪・腹輪・膝輪と名づくるは、行者に依って名を立つ。金剛界には^五字の一字を以て変じて五輪を成じ、胎藏界には^五字の一字を以て五輪を現ず。或いは共にて^五字を以て五輪世界を成ず。若し行者に約せば白浄信心を以て五輪の種子となす。白浄信心とは浄菩提心なり。

是れ則ち如実知自心なり。豎には十重の浅深を顕し、横には塵数の広多を示す。

という。周知のごとく、腰・臍・心・額・頂に^五字の五字を配するものであるが、こうした同様の五輪観は『卒塔婆十種釈』や『五字略頌』にも説かれることであつた。

こうした、自らの体に五輪曼荼羅を観じるこの五輪曼荼羅観を説く『五輪九字明秘密義釈』には「深く信じて多年これを修して既に初位の三昧を得たり」⁽³¹⁾とあるように覚鑊聖人にとって特に重要な観法であつたと考えられる。

こうした覚鑊聖人の五輪曼荼羅観を踏まえたものであろうか、神奈川県立金沢文庫には「本尊図(五輪形)」という図が現存しており興味深いものがある⁽³²⁾(図3)。櫛田良洪博士も『続真言密教成立過程の研究』において紹介しているが、これに類似したものが『諸流灌頂秘藏鈔』にもあり関連性も考えられる⁽³³⁾。しかし「覚鑊上人作」としたものは金沢文庫本のみである。

また、本図の裏書には、

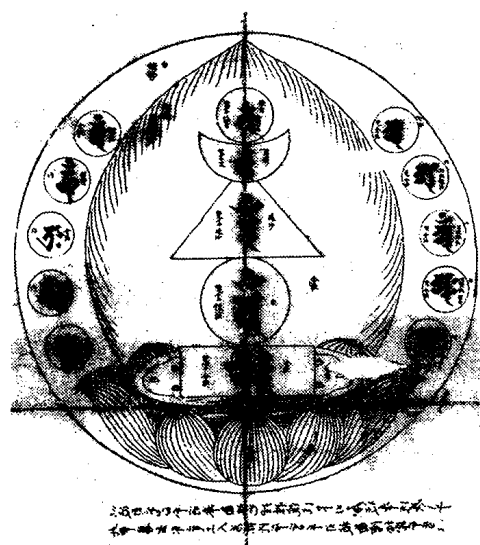


図3 本尊図(五輪形)

興教大師覚鑒の曼荼羅観について（赤塚）

故法印御房手跡／本表紙云／此本尊者^{云々}上人為臨終本尊手自被図絵秘藏本尊^{云々}／以彼自筆正本所奉図
謁也理性院法印御房被奉供養之畢

とあり、単に五輪曼荼羅観と関連するだけでなく、この図は覚鑒聖人の臨終の本尊であつたと伝えられている。

こうした五輪曼荼羅観に係して、『密厳浄土略観』には

つぎに浄満月輪あり、つぎに八葉華王あり。上に種子法身あり。体性明浄にして、光沢鮮白なり。万徳を成就し、二利を円満せり。種子転じて無所不至の五大所成の法界塔婆となる。五智の色光を放つて、⁽³⁴⁾無辺の仏刹を照らし、衆徳円備して、三密具足す。塔婆変じて周遍法界の浄妙法身大日如来となる。

とあり、法界塔婆観とも換言できるが五輪曼荼羅観と関連性があり、さらに月輪・八葉・種子・法界塔婆・五智の色光そして大日とあり、自身即塔婆、塔婆即大日ということになる。「本尊図（五輪形）」が臨終の本尊とするならば、まさに密厳浄土の観を五輪曼荼羅でもって観じることができるのである。

まとめ

以上をまとめると、図像的解釈を探るよりも観行としての曼荼羅観に注目すべきであつて、覚鑒聖人の曼荼羅観は代表的著作『五輪九字明秘密義釈』によって体系化されているといつても過言ではない。『五輪九字明秘密義釈』はまさにその題名が示すように、五輪曼荼羅観と九字曼荼羅観に関して秘密解釈を施している。そこで説かれる思想そのものが曼荼羅であり、覚鑒聖人の曼荼羅観の根本は五輪曼荼羅観であり、それが即大日であり阿弥陀であるというのが『五輪九字明秘密義釈』である。

また、曼荼羅の語義に関して、「真言」「密語」「秘密語」の意があるとし弘法大師の『十住心論』や『声字実相義』の解釈を用いていることも明らかとなった。

また、覚鑊聖人作と伝える曼荼羅も『興教大師伝記史料全集』によって知ることができる。これら数種の別尊曼荼羅のほかに、金沢文庫には神祇曼荼羅が伝えられており興味深い。覚鑊聖人の著作に九字（阿弥陀）曼荼羅を除きこれら別尊曼荼羅が登場することはないが、なぜそのように伝えられるようになったのかを探ることも必要である。

つまり、『五輪九字明秘密義釈』では阿弥陀曼荼羅を例にあげ別尊の世界を説いているが、やはり中枢をなすのは五輪曼荼羅観であって、『卒塔婆十種釈』『五字略頌』『密厳浄土略観』『五輪九字明秘密義釈』に説かれるものであり、五輪を自身に観じる観法こそが、即身成仏につながるものと捉えていた。すなわち、曼荼羅が図像的表現に留まることなく自身に世界を観じる観法こそが曼荼羅であるということを再確認することができるのである。

註

〔付記〕 本論文執筆にあたり、真言律宗別格本山称名寺様、神奈川県立金沢文庫様には写真掲載のご許可を頂き、また同文庫主任学芸員西岡芳文様には御教示賜りましたこと、衷心より厚く御礼申し上げます。

- (1) 『興教大師全集』下巻 九三三頁。
- (2) 『興教大師全集』下巻 九四一頁。
- (3) 小峰彌彦「興教大師の曼荼羅観（二）」（『興教大師覚鑊研究』春秋社 平成四年）。
- (4) 『興教大師全集』下巻 一四四四頁。

興教大師覚饒の曼荼羅観について (赤塚)

- (5) 『興教大師全集』上巻 二六八頁。
- (6) 『大正新修大藏經』第三九卷 六一〇頁中
- (7) 『興教大師全集』上巻 五五四頁。
- (8) 『興教大師全集』下巻 一〇五二―一〇五三頁。
- (9) 『大正新修大藏經』第三九卷 六二五頁中
- (10) 『定本弘法大師全集』第二巻 三〇八頁。
- (11) 『定本弘法大師全集』第三巻 四〇頁。
- (12) 『興教大師全集』下巻 一一六一頁。
- (13) 那須政隆「興教大師の弥陀観」(『智山学報』第六輯)。
- (14) 頼富本宏「興教大師の尊格信仰」(『興教大師覚饒研究』春秋社 平成四年)。
- (15) 松崎恵水『平安密教の研究』四一六頁。
- (16) 拙稿「『五輪九字明秘密釈』における阿弥陀曼荼羅について」(『密教図像』一四号)。
- (17) 『興教大師全集』上巻 一六八―一六九頁。
- (18) 『定本弘法大師全集』第四巻 一六一頁、一七六頁、一八六頁。
- (19) 『興教大師全集』上巻 一七三頁。
- (20) 『興教大師全集』上巻 五〇―五一頁。
- (21) 『興教大師全集』上巻 五一頁。
- (22) 千葉県市川市徳蔵寺蔵。
- (23) 頼富本宏「三峰信仰に見る神仏習合―十一面観音曼荼羅をめぐる―」(北畠典生博士古稀記念論文集 上
『日本仏教文化論叢』 平成十年)。

- (24) 『興教大師伝記史料全集』史料「三、工芸筆蹟」を参照。
- (25) 『興教大師伝記史料全集』史料 写真図版。豊山長谷寺所蔵の種子曼荼羅、大仏頂曼荼羅に関しては『豊山長谷寺拾遺』第一輯に収録。
- (26) 『興教大師伝記史料全集』史料 一二六三頁～一二六四頁。大仏頂曼荼羅については『豊山長谷寺拾遺』第一輯「絵画」二六三頁にもあり。
- (27) 称名寺蔵（神奈川県立金沢文庫保管）。（イ）金沢文庫古書マイクロ複製本 請求番号二九七・一〇二〇、（ロ）同二九七・一〇二五。
- (28) 『真言密教成立過程の研究』正編二九八～三〇三頁、続編八四六～八四九頁。
- (29) 拙稿「興教大師と神祇（一）——『諸大事十結』における根来山鎮守拝見作法について——」（『大正大学大学院研究論集』二四号）、「興教大師と神祇（二）——根来に勧請された神祇について——」（『豊山教学大会紀要』二八号）。
- (30) 『興教大師全集』上巻 三七八頁。
- (31) 『興教大師全集』下巻 一一三九頁。
- (32) 称名寺蔵（神奈川県立金沢文庫保管）。金沢文庫古書マイクロ複製本 請求番号二九七・八二四。
- (33) 『真言宗全書』第二七巻 三二六頁 下。
- (34) 『興教大師全集』下巻 一一八五頁。
- 【キーワード】秘蔵記、九字真言、法界塔婆観